

中等部・高等部

自由学園中等部・高等部における英語教育と国際交流活動の展開

高松功太郎

自由学園の英語教育は、知識偏重や受験対策に偏らず、学んだ英語を実際に活用し、他者と理解を深め合うことを重視している。本校は、自らの考えを適切に表現し、相手の意図を理解することで相互理解に至る、コミュニケーション能力の育成を教育の根幹に据えている。さらに、英語を通じて世界の出来事を知り、それを自分自身の問題として考える姿勢を育むことを目指している。「世界を身近に 世界を平和に」という理念を定め、2024 年度は英語教育と国際交流を両輪として実践を展開した。

1. 背景

2024 年度の実践は、2023 年度に行われた英語科内検討会の成果を受けた。同会では、現状分析を行い、自由学園の英語教育の将来像を描くとともに、課題として①実際の英語使用場面の不足、②より発展的な学習を求める生徒への対応、③中等部生対象の国際交流機会の不足を確認した。2024 年度はこれらを踏まえ、具体的施策を導入した点に特徴があった。

2. 英語教育の実践

授業においては、中等部では基礎技能の定着と短い発表や対話を通じた実践を重視した。さらに、4 年前から本格的に導入した Web 英会話を継続して実施し、一人一人が発話できる機会を確保した。高等部では基礎技能のさらなる定着とともに、より複雑な表現を用いて自らの考えを発信する力、批判的思考力の育成に力を注いだ。また、週一回 Native Speaker による授業を継続して実施し、対面で英語を表現する機会を設けた。さらに、1 学期と 2 学期には、それぞれ 2 名ずつイギリスからの Teaching Assistant (以下、TA)を受け入れた。TA は授業内外で自国の文化やネイティブな表現を生徒たちにわかりやすく伝え、身近な Native Speaker として、生徒たちが英語を話すモチベーションを高めた。これにより、生徒は日常的に英語を「使う場」を得た。

入試改革にも取り組んだ。2024 年度から Listening 試験を導入し、読み書き偏重の現状から脱却し、コミュニケーションに必要な力をより総合的に測定する方向へ移行した。また、文法・Writing 問題においても、単純な和文英訳ではなく、特定の状況下で適切な表現を求める条件英作文など

で、言語知識の運用力を評価した。今後は、「実際の活用場面を想定した問題を作成する」という方針に基づき、Speaking 試験の導入なども視野に入れ、四技能をより総合的に評価する体制を整えていきたい。

検討会で挙げられた課題の解決に向けても具体的な施策を実施した。①「実際の英語使用場面の不足」には、中 2・中 3・高 1 の全員を対象とする Tokyo Global Gateway (以下、TGG)研修を導入し、模擬社会環境で英語を用いたコミュニケーションを体験する機会を設けた。②「高度な学習を求める生徒への対応」として、中 1 から高 3 の希望者が参加できる British Hills 研修を実施し、オールイングリッシュ環境で生活する機会を提供した。③「中等部生対象の国際交流機会の不足」については、TGG を中 2 から開始し、British Hills も中 1 から参加可能とした。これにより、従来は高等部中心であった国際交流の機会を中等部段階にまで広げ、国際的な感覚を養い、視野を広げる機会を確保した。

3. 国際交流活動の展開

英語教育と並行して、国際交流活動を大きく展開した。海外派遣では、フィンランド Alajärvi lukio と Vimpelin lukio (共に高校)に 4 名、イギリス Cheltenham Ladies' College に 2 名、アメリカ The Masters School に 4 名を派遣した。生徒は授業参加や寮生活を通じて異文化に触れ、英語で自らの意見を述べる経験を積んだ。ある派遣生徒は「相手に自分の考えが伝わった瞬間、言葉に責任を持つことを実感した」と語り、言語を媒介とした主体的学びを体得した。

受け入れも活発であった。フィンランド高校生 4 名を 5 月に迎え入れ、アメリカ The Masters School の生徒を 1 週

間受け入れた。中 3 は Alme Skole、高 1 は Höjer Efterskole (ともに本校生徒と同年代の生徒が通う学校)とそれぞれ同世代のデンマークの学校の生徒との交流を行い、互いの文化や学校生活について活発な意見交換を行った。さらに、ポーランド高校生によるコーラス披露やデンマーク体操 TA の受け入れなど、短期的ながら多彩な交流を実現した。こうした活動により、生徒は国際理解を「遠い出来事」ではなく「日常の学び」として捉える視点を獲得した。

また、上述の英語 TA は授業のサポートに加え、毎週の ESS (English Speaking Society) の活動にも参加し、生徒との自由な会話や議論を通じて、英語力のみならず異文化理解を深める場を提供した。TA はまた、教職員を対象とした英会話の時間も定期的に設け、英語科以外の教員も国際交流に参加できる機会を整えた。これは、本校が掲げる「共生共学」の理念に基づき、学内の国際化を推進するための取り組みであり、国籍や文化の多様性が日常的に存在する環境をつくる試みでもあった。

希望者を対象とした海外研修旅行では、カンボジア、デンマーク、ネパールを訪問した。参加生徒は現地での交流や体験を通じて、各国の文化や人々の暮らしを肌で感じるとともに、平和や共生の意味を自ら考える契機を得た。

4. 成果と課題

2024 年度の取り組みにより、生徒は英語を「学習科目」から「理解と表現の道具」へと捉え直し、積極的に活用する姿勢を示した。国際交流に参加した生徒は、多文化社会における自らの役割を考察する当事者意識を持つようになり、自由学園の理念に直結する成果をあげた。特に、中等部から国際的な体験を積む機会を得たことは、生徒の早期からの視野拡大に寄与した。

一方、課題も明確になった。中等部プログラムのさらなる拡充、より発展的な英語学習機会を望む生徒への継続的支援、国際交流機会の公平な提供は今後の重要な課題である。これらについては、異年齢や他教科との連携を深めたり、探求活動と統合したりすることでも改善を図る予定である。

5. まとめ

2024 年度は、英語教育と国際交流の両面で大きな進展を遂げた年度であった。2023 年度検討会での課題認識を

受けて TGG や British Hills を導入・拡充し、中等部から高等部に至るまで実践的な英語使用の場を整備したことは意義深い。生徒は英語を通じて世界を身近に感じ、国際社会の課題を自らの問題として考える姿勢を育んだ。今後も得られた成果を基盤とし、課題を発展の契機としてとらえることで、教育実践の更なる深化を図る。英語科で定めた「世界を身近に 世界を平和に」という理念のもと、生徒が未来に向かって主体的に行動する力を育成する教育を一層推進していく。



2-1 British Hills での研修



3-1 The Masters School 生徒との渋谷・原宿での交流



3-2 高 1 と Höjer Efterskole 生徒との校内交流